

研究課題によせて

太 田 利 隆*

本5月号には例年にならい、開発土木研究所における研究課題の概要を掲載している。当所における研究課題は大きく行政部費による研究と事業費による調査試験に分けられる。行政部費による研究は基礎的研究、自主的研究であり、研究室の柱となる研究である。5カ年毎策定される「研究5カ年計画」に基づいて実施されている。現在の計画は

- 1) 積雪寒冷地における国土・自然環境の保全ならびに防災に関する研究
- 2) 積雪寒冷地における生産基盤の整備と施設の効果的な維持管理に関する研究
- 3) 積雪寒冷地における快適な生活環境の創出に関する研究
- 4) 積雪寒冷地における先進技術の応用および材料・資源などの活用に関する研究

を重点項目として昨年から実施されているものである。

一方事業費による調査試験は北海道開発局の行政を技術的側面からサポートするもので積雪寒冷、特殊軟弱地盤など北海道に特有な技術的諸問題の解決は勿論のこと、フィジビリティスタディ、計画調査を含む広範なテーマが取り扱われている。

今年の新規テーマは、親水性構造物の水理に関する研究、沿岸域のレクリエーション水域創出技術に関する研究、景観工学に基づく港湾漁港空間創出に関する研究、スタッドレスタイヤの普及に伴う影響調査に関する研究、地球温暖化による積雪寒冷地の水循環への影響に関する研究など、人間生活・周辺環境との調和、地球環境問題に関する研究が目につく。

元来人々は水辺に生活し、水上に舟を浮かべ、漁をし、また水がつくりだす景観の美しさを享受してきた。しかし、機能性と経済性を最重視した沿岸構造物の建設により、水辺から遠ざけられたのが現状である。第2次世界大戦により社会資本の多くを失なった日本が社会基盤を早急に整備するためには選択の余地はすくなくしたものとおもわれる。しかし同時に機能性と経済性のみを追及することは必ずしも人間生活を豊かにするものばかりではないという貴重な教訓を得た。日米構造協議において指摘されるように日本は欧米に比し、まだまだ十分豊か

であるといえないまでも、多少の余裕ができ、人間生活と自然との調和、景観を考えたより質の高い開発・建設が求められる様になってきた。上記の研究が契機となって、人間と心を通わせた新しいウオーターフロント群が北海道で輩出することを夢見ている。

一方スパイクタイヤの使用禁止は都会に住む人々に健康と快適な生活を約束するものとして歓迎されているが、反面冬の交通事故の多発、経済活動に及ぼす影響が懸念されている。スタッドレスタイヤに適応した道路構造、道路管理技術が早急に確立されることを期待する。安易に塩をまいて環境破壊や構造物の劣化を助長することのない様にしたいものである。

地球環境問題は被害や影響が一つの国に止まらず国境を越え、また地球規模にまで広がる環境問題または国際的な取組みが必要な開発途上国の環境問題であり、オゾン層の破壊、地球の温暖化、酸性雨、有害廃棄物の越境移動、海洋汚染、野生動物の種の減少、熱帯雨林の減少、砂漠化、開発途上国の公害問題などである。当所においても、昨年11月30日に開催した開発土木研究所講演会において気象研究所長 岡村存博士に特別講演「気候の子測と地球環境問題」をお願いするなどその理解を深める事に努力してきたところである。地球温暖化の問題一つをとっても人間活動、太陽活動、モデルの取り方、海水の影響など複雑な要因がからみあっているのみならず、経済における南北問題も関連して、現象の解明は勿論のこと、問題の解決は非常に困難であると考えられる。しかし地球上で人間の活動が続くかぎり確実に、しかも次第に深刻な問題として直面することである。当所として貢献できる範囲は当面、地球温暖化による積雪寒冷地の水循環への影響に関する研究、省資源、省エネルギーに関する研究などに限られたものになると思われるが、積極的に参画して行きたいと考えている。

美観、景観、人間生活との調和などというテーマは、これから北海道開発局が仕事を進めて行くには避けてとおることのできない問題である。時として個人の主観や観念に左右されるケースもあると思われるが、斬新で、大胆且つ緻密なアイデアが多数提案されることを期待する。

*研究調整官